

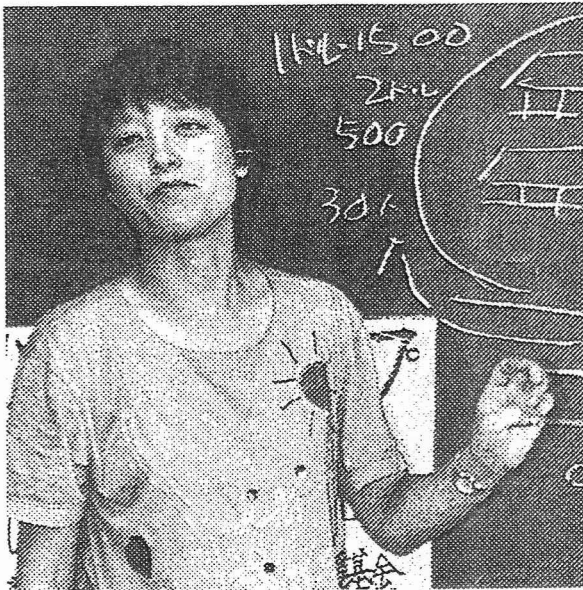
# ルワンダ難民救援の山田緑看護婦 任務終え帰国

## キャンピングに患者の列

# とっと糧食も布毛

内戦のルワンダから隣国に相次いで流出している難民の医療活動にあたるため、岡山市に本部を置くアジア医師連絡協議会（AMDA、菅波茂代表）と岡山カトリック教会が結成した「ルワンダ難民救援グループ」（原田豊己代表）からザイルへ派遣されていた、岡山市楷津、医療法人アスカ会の山田緑看護婦（三七）が七日、一カ月の任務を終え帰国した。山田看護婦は「何もないところから始めて訪問看護までできるようになり、充実した気持ちです」と成果の手ごたえを語った。

山田看護婦はルワンダ難民のザイルのゴマ地区のキャンプで医療活動を行った。約二十五万人の難民が



現地の難民キャンプの様子などを説明する山田さん。岡山天神町の岡山カトリック教会で

## 寒さと飢え 防げれば…

いるキャンプで、ひと足先に現地向かった帝京大学産婦人科助手の渋谷健司医

師（三八）らとともに、テントを設営し、一日約四百人の治療にあたった。訪れる患者の八〇％は赤痢で、ほかに肺炎やマラリアの人もいた。キャンプの前の道路には毎日むしろに巻かれた遺体が並んでおり、「命の安さ」を感じたという。気候は寒く、セーターを着ることもあった。

「百人以上の患者が列を作って治療を待っていました。寒さと飢えが防げればなんとかなる。毛布や食糧がもつとあれば、と思いましたが」

山田看護婦は十七日午後七時から、岡山市天神町の岡山カトリック教会で、同じくザイルに派遣されたAMDA事務局長の津曲兼司医師（三七）や原田神父（四〇）らと活動報告会をする。問い合わせはルワンダ難民救援グループ（〇八六・二八四・五九七六）。